

カナリア

黒岩力也

**登場人物**

小野 白い男  
山田 青い女  
中山 赤い老婆  
殿村 黒い子供

(シーン1) 名前

イスが一つ。

小野が下手から来る。山田、上手からイスを持って登場。

山田、イスに座る。小野もイスに座る。

山田 じゃあ、始めましょうか。

小野 すいません。

山田 何が？

小野 私、何もないんです。

山田 そうですか。

小野 だから、すいません。

山田 名前もないんですか？

小野 名前があります。

山田 聞かせてください。

小野 小野と言います。

山田 私は、山田です。

小野 でも、それだけなんですけど。

山田 それだけって？

小野 小野という以外に何もないんです。

山田 忘れてしまったということですか？

小野 違います。

山田 違うんですか。

小野 すいません。

山田 小野！

小野 はい。

山田 小野と山田、どっちがいいですかね？

小野 どっちがつていうと？ どういう基準で？

山田 例えば……響きとか。

小野 響きですか。

山田 響きとしては、小野の方がいいですね。

小野 そうですか？ 山田だっていいと思いますよ。

山田 でも山田ですよ。

小野 いいじゃないですか。

山田 小野には負けます。

小野 そんなことないですよ。

山田 取り替えましょう。

小野 名前をですか？

山田 今からあなたは山田です。

小野 いや私は小野ですから。

山田 でも先ほどあなたは響きとしては山田の方がいいとおっ

しゃいましたよ。

小野 いいましたけど。

山田 山田！

小野 ……はい。

山田 じゃあ、これから山田としての思い出もいくつかあなたに差し上げましょう。

小野 思い出か。

山田 それであなたは山田という名前以外に思い出も手に入れる事になるんです。

小野 どんな思い出なんですか？

山田 主にカナリアに関する思い出です。

小野 カナリア。それは何ですか？

山田 お見せしましょう、おいで。

イスを持って中山が来る。中山、イスに座る。

山田 これがカナリアです。

小野 へー。

中山 どうも中山です。

小野 え？

山田 中山という名前のカナリアなんです。

小野 なるほど。

山田 このカナリアは飛べません。そういう病気なんです。

小野 病気。

中山 すいません。

小野 いえ、お大事に。

中山 どうも。

山田 病名は人間です。

小野 治るんですか？

中山 手術すれば治るそうです。

小野 よかったですね。

山田 でも現時点ではどういう手術をすればいいのかが解明されてないんです。

小野 解明ですか。難しそうですね。

山田 カナリアに関する思い出は以上です。

小野 そうなんですか。

中山 すいません。

小野 もう充分ですから。

山田 さて、これからのプランなんですが。

小野 ちよつと待って下さい。なんのプランなんですか？

山田 あなたと、このカナリアのプランですよ。

小野 プランというのは言い換えれば計画みたいな事ですか？

山田 はい。保険はどうしますか？

小野 保険ですか。

山田 ガン保険がおすすめてです。

小野 ガン保険。

山田 もしもの時に必要ですよ。

小野 お任せします。

山田 じゃあ、加入していただきます。印鑑はお持ちですか？

小野 いいえ。

山田 ではこのカナリアの右手の親指とあなたの右手の親指をくっつけて下さい。

小野 親指ですか？

山田 はい。

小野と中山、右手の親指をくっつけ合う。

山田 はい。それで結構です。

小野 いや、どうも。

中山 どうも。

山田 これで加入が完了しました。安心して暮らせませすよ。

小野 ご親切にどうも。

山田 それでは山田として、あなたは仕事を見つけて下さい。

小野 仕事ってどうやって見つければいいんですか？

山田 さあ、知りません。

山田、上手に去る。

小野 困ったな。

中山 職安に行きましよう。

小野 職安ですか？ それはどんなモノなんですか？

中山 職業安定所。略して職安です、呼べば来ますよ。

小野 なんて？

中山 おーい、職安って。

小野 恥ずかしいですね。

中山 でも仕事が見つかりませんよ。

小野 そうか、じゃあ思い切って。

殿村が来る。

殿村 呼びましたか？

中山 ああ、来ちゃいましたね。

小野 これが職安ですか。

殿村 職安の殿村です。

小野 山田です。お世話になります。

殿村 ここ座ってもいいの？

中山 どうぞ。

殿村 じゃあ。

殿村、イスに座る。

殿村 さてと……で？ どんな仕事が見たいの？

小野 なんて言われても。

殿村 確かあなた山田って言ってたよね。

小野 はい。

殿村 そうすると、こちらで紹介出来る仕事は限られて来るんだよね。

小野 そうなんですか。

殿村 資格とかあるんなら別だけど。

小野 資格ですか。ガン保険なら入ってますけど。

殿村 ガン保険は仕事には関係ないな。

中山 なんとかありませんか。

殿村 あんたは？

中山 中山です。

殿村 中山か、あんたになら色々で紹介できるんだだけどね。

中山 いや、私じゃなくてこっちの山田に紹介してください。

殿村 そう言われてもな、資格もないんでしょ？

小野 資格じゃなくて、思い出ならあるんですけど。

殿村 ほう、どんな思い出なの。

小野 主にカナリアに関する事なんですけど。

殿村 カナリアいいじゃないの。その思い出使えるかもよ。

小野 よかった。

殿村 で？ どんな思い出なの？

小野 はい。ええっと……あれ？ なんだっけ。

殿村 おいおい。もしかして忘れちゃったの？

小野 忘れてないです。

殿村 じゃあ、聞かせてよ。

小野 ちよっと待って下さい。ええっと。すみません、なんで

したっけ？

殿村 中山に聞いてどうすんの！ あんたこの山田の思い出知ってるの？

中山 さあ、知りません。

中山、上手に去る。

小野 困ったな。

殿村 いや、それはこっちのセリフだよ。資格もない上に思い

出もないんじゃないね。

小野 すいません。

殿村 とにかく何か資格取ってみたらどうですか。

小野 それはどこで取れるんですか？

殿村 そりゃあ学校だよ。

小野 学校。

殿村 今の時代だったらパソコンなんかいいんじゃないかな。

パソコンの学校。

小野 パソコンですか。

殿村 行ってみなよ。

小野 はい、それは呼ばば来ますか？

殿村 そりゃ、呼ばば来るよ。

小野 なんて？

殿村 パソコンの学校。

小野 なるほど。じゃあ、呼んでみます。

殿村 ちょっと待って、呼ぶ前に聞きたいんだけど。

小野 はい。

殿村 選挙についてどう思う？

小野 どうって？ 特になにも。

殿村 じゃあ、清き一票についてどう思う？

小野 いや、そうですね。選挙とパソコンでなにか関係あるんですか？

殿村 ないよ。

山田 山田が来る。山田は「小野」と書かれた、たすきをかけている。

山田 どうも、立候補者の小野です。

殿村 ご苦労様です。職安の殿村です。

山田 このイス空いていますか？

殿村 はい、空いていますよ。

小野 すいません。それカナリアの席なんですけど。

山田 カナリア？ 駄目かなあ。このイスで選挙運動したいんだけど。

殿村

殿村 どうぞ使って下さい。カナリアなんかより選挙運動の方が大事ですから。いいですよ？ 使って貰っても。

小野 はい、そういう事でしたらどうぞ。

山田 じゃあ、ちょっと失礼。

山田、イスの上に乗る。

山田 では……(手足を動かしながら)私が立候補者の小野です。

殿村 おおつ！ 見事な選挙運動ですな。

山田 ご声援ありがとうございます。小野、小野、小野。小野に清き一票をよろしくお願いいたします。

小野 これが選挙なんですか？

殿村 ええ、そうですよ。

山田 私が当選した暁には公約を守ることを約束いたしましたし、う。

殿村 公約を守ることを公約にするなんて凄いな。

山田 そうでしょう。

小野 公約ってなんですか？

殿村 みんなに約束する事ですよ。

小野 なるほど。それでこの人は何を約束したんです？

殿村 さあ、知りません。

殿村、上手へ去る。

山田 明らかに選挙妨害ですな。

小野 何がですか？

山田 あなたのせいで支援者が一人減ったじゃありませんか。

小野 すいません。

山田 警察を呼びます。

小野 警察ですか？

山田 選挙妨害は立派な犯罪です。

小野 私、立派な事をしたんですか。

山田 ええ、でも犯罪ですから。

小野 そうですか。ええっと、呼ぶのはあなたなんですよ？

山田 はい。じゃあ、早速。

小野 どうぞ。

山田 おーい、警察。

中山 中山が来る。

中山 呼びましたか？

山田 はい、呼びました。

中山 事件ですか？ 事故ですか？ 違反ですか？ それとも

迷子ですか？

小野 (山田を指して) 迷子です。

中山 (山田に) あなたが？

山田 違います。ほら、私は立候補者の小野です。

中山 申し遅れました、警察の中山です。でも迷子じゃなきゃ

なんですか？

山田 犯罪です。

中山 おお、犯罪か。

山田 選挙妨害されました。

中山 そいつは災難でしたね。

山田 まったくいい迷惑ですよ。

小野 すいません。

中山 あなたが犯人ですか？

小野 山田です。

山田 (小野を指して) 犯人の山田です。

中山 いかにも悪そうだな。

山田 とちめてやって下さい。

中山 了解しました。お前を逮捕する。

小野 そうですか。あの、すみません犯人て言うのはもしかしたら何かの資格ですか？

中山 資格？

小野 それがあると仕事が見つかるみたいなんですけど。

山田 犯人になると仕事は、なかなか見つからないんだぞ。

小野 じゃあ、資格ではないんですね。

中山 そうだな。

小野 私、パソコンの学校呼びたいんですけど。

中山 パソコン？

山田 犯人がパソコン。

小野 じゃあ、呼びますね。

中山 駄目だ！

小野 駄目なんですか？

中山 犯人には黙秘権が認められてるが、パソコンの学校を呼

ぶ権利は認められていない。

小野 そうなんですか。

中山 あと、弁護士を呼ぶ権利がある。

小野 弁護士か。

中山 呼ぶか？

小野 はい。おーい、弁護士。

殿村が来る。

殿村 呼びましたか？

小野 はい、呼びました。

殿村 弁護士の殿村です。

中山 警察の中山です。

山田 立候補者の小野です。

殿村 立候補者？

中山 本件の被害者です。

殿村 ああ。

山田 清き一票を、よろしく。

殿村 そうすると、被告は（小野に）あなたですか？

中山 そうです。

小野 被告？ 私は犯人の山田です。

殿村 じゃあ、やっぱりあなただ。

小野 被告ってなにかの資格ですか？

中山 違うよ！

殿村 （小野に）あなた裁判しますか？

山田 裁判！

小野 裁判ですか？

殿村 大丈夫ですよ、弁護士の私がついてますから。

小野 じゃあ、お願いします。

山田 ああ、裁判。

殿村 あなた確か警察の中山でしたよね？

中山 はい、警察の中山ですけど。

殿村 すみませんが、裁判長を探していただけませんか？

山田 えっ！

中山 裁判長をですか？

殿村 （ポケットから紙を出して）これが捜索届けです。

中山 （受け取って）おお、なるほど。これはつまり迷子ですね。

殿村 裁判長がいないと裁判になりませんから。

中山 了解しました！ では！

中山が走り出したのを山田が追いかけて引き留める。

山田 あ、ちょっと待って下さい。

中山 なんですか？

山田 私、裁判官の資格を持つてるんですけど。

中山 裁判官？

山田 検定で二級を取得してます。

中山 二級か。

山田 裁判やりたいんですけど。

中山 でも、あなたは被害者ですから。法律の難しいことはわからないけどいくら資格があつても、それはどうかな。

山田 やっぱ駄目ですか。

中山 それに私が捜索しているのは、裁判長ですから。

山田 そうですよ。

殿村 (山田に)あの、すいません。

山田 私ですか？

殿村 被告側としては、二級でもかまいませんよ。

中山 いいんですか！

殿村 ええ。

山田 本当に？

殿村 はい。被告本人がいいって言ってますから。

山田 (小野に)いやあ、ありがとう！ あなたのお陰です。裁判が出来るなんてまるで夢のようだ。今後あなたが選挙に立

候補したら私は迷わず一票を投じますよ！

小野 いや、私は別に。

殿村 では、そろそろ。始めましょうか。

山田 始めるんですか？

殿村 裁判官！

山田 はい！

殿村 裁判を始めて下さい！

山田 これより！ 裁判検定二級の裁判を開廷いたします！

開廷に先立ち被告人である山田様より選手宣誓を頂戴いたしたいと存じます。

殿村 裁判官！

山田 弁護人。

殿村 被告の代理人であります私が選手宣誓したいのですが、

が、いかがでしょうか。

山田 本来ならば被告人本人の選手宣誓を頂戴したいのですが、

被告の名前が山田であることを考慮して特例として認めましょう。

中山 異議あり！

山田 異議ですか？

殿村 異議あり！

山田 こつちも？

殿村 警察は裁判に口を出さないでいただきたい！

中山 異議あり！

山田 どうぞ。

中山 今、法廷は二級の裁判官による裁判でありますから警察も参加する権利がある事を申し上げます。

山田 まあ、そうですね。只今の異議を認めます。

中山 ありがとうございます。

殿村 裁判官！

山田 弁護人。

殿村 先ほどの選手宣誓の件ですが、宣誓文を読み上げる替わりに俳句を一句ひねる事を被告人本人の希望として提案いたします。

山田 警察側は只今の提案いかがですか？

中山 異議なし！

山田 弁護側の提案を認めます！ 被告人は俳句を一句ひねっ

てください。

殿村 どうぞ。

小野 そんな無理です。

殿村 (小野に) おい。

中山 異議あり！

山田 警察。

中山 裁判官！ 今のが俳句なんですか？

山田 さあ？

殿村 今のは違います。

中山 裁判官！ 先ほどの提案で弁護人は被告人本人の希望とはつきりと言つたにも関わらず、ついさっきの被告人の発言により被告人は俳句をひねる意志がなかった事が判明いたしました。よって、

殿村 異議あり！

中山 まだ途中だぞ！

殿村 異議あり！

中山 異議あり！

山田 静粛に！ 二人とも静粛にお願いします！ 判決を言い渡します。

殿村 え？ もうですか！

山田 選挙妨害の罪により、被告人山田の名前を剥奪します。

殿村 異議あり！ 刑が重すぎます！ 失う物が多すぎます。

中山 裁判官！ 只今の判決！ 警察は妥当だと認めます！

山田 静粛に！……判決を続けます。

殿村 続きがあるんですか？

山田 被告人山田の名前を剥奪する替わりに、この男に常識と想像力を与える事とする。

小野 常識と想像力。

山田 そして今後、被告人山田は自らを「白い男」と認識する事とする。

小野 白い男。

山田 ただし、この男がカナリアを見つけることが出来たら山田という名前を被告に返還する事とする、以上。……閉廷！

暗転

(シーン2) 色

小野……白い男

山田……青い女

中山……赤い老婆

殿村……黒い子供

白い男、マッチを一つ持って現れる。マッチを擦る。

マッチは湿気ってて火がつかない。

白い男マッチを投げ捨てて。

白い男 今朝。マッチ売りの少女は死にました。凍死です。少

女の体に白い雪が降り積もり。命の炎を凍らせたのです。私

は白い男。頭の中まで白いんだ。ニュース速報によると、

マッチ売りの少女は凍える手でマッチを擦ったそうです。世

知辛い世の中になったものです。イタイケな少女が街角で凍

え死ぬなんて。かわいそうだと思いませんか。心が痛みます。

しかし。そんな私の心の痛みもすぐに消えてなくなります。

だって私は白い男。頭の中まで白いんだ。

青い女、鳥かご一杯のライターを持って現れる。

青い女 ライターは、いらんかね。便利な便利なライターだよ。

白い男 ライター？

青い女 あると便利だよ。

白い男 マッチはないのか？

青い女 マッチなんて時代遅れ、これからはライターだよ。

白い男 でもマッチが欲しいんだ。

青い女 ライターにしときなよ。

白い男 ライターじゃ駄目なんだ。

青い女 どうして？

白い男 あんたマッチ売りの少女を知っているかい？

青い女 あれはあたしのせいじゃないよ！

白い男 誰もあんたのせいだなんて言っていないだろ。

青い女 いるんだよ！ あたしのせいだって石を投げつける奴

がね。

白い男 そいつはひどいな。

青い女 だろう？ まったく世知がない世の中になったもんだ

よ。

白い男 世知がない？ それ世知辛いじゃない？

青い女 世知がないでしょ。世知辛いなんて言わないわよ。

白い男 言うよ。

青い女 そんなの聞いたことないわよ。それ、あんたの勘違い

だよ。

白い男 そんなことないよ、大体、世知がないってどういう意

味なの？

青い女 え？ それは……世の中がアレって事でしょ。

白い男 アレって？

青い女 よく知らないけど、世知がない世の中ってよく言うじゃない。

白い男 だから本当は、世知辛い世の中だよ。

青い女 まあ、そんなことどうでもいいじゃないの。とにかく

世の中なんてのは、ひどいやつが多くてイヤになるって事だよ。

白い男 ああ、同感だね。最近特に世の中がささんでる気がするよ。

青い女 なんであたしのせいなんだい？ あのマッチ売りが死んだのだって、実際の所さ世の中が悪いと思わないかい？

白い男 世の中って一体何なんだろうな。

青い女 あたしだって別に好きこのんでライター売ってるわけじゃないんだから。どっちかって言ったらライターよりマッチの方が好きなんだけどね。

白い男 だったらマッチを売ればいいじゃないか。

青い女 駄目駄目。マッチじゃ商売にならないよ。

白い男 売れないのか？

青い女 ライターの方が便利だからね。誰も好きこのんで不便

なモノは使わないさ。

白い男 なるほどな。

青い女 けど、あんた珍しいね、マッチが欲しいだなんて。

白い男 マッチを擦って試してみたいんだ。

青い女 何を？

白い男 その炎の中に、見えるはずだ。

青い女 え？

白い男 今、私が求めているモノが。

青い女 炎の中に？

白い男 ああ。

青い女 どうしてライターの炎じゃ駄目なの。

白い男 長く、つきすぎるよ。

青い女 その方がいいじゃない。

白い男 よくない。

青い女 へー、そう。

白い男 そんな目で見ると。

青い女 だって。

白い男 あんただって、わからなくなることがあるだろう？

分が何を求めているのか。 自

青い女 ないよ。

白い男 ないの？

青い女 ないね。

白い男 ぜんぜん？

青い女 全然。

白い男 どうして？

青い女 自分の事くらいわからないの？

白い男 わからないよ！

青い女 考えすぎなんじゃないの？

白い男 何が？

青い女 自分のこと。

白い男 考えなきや、わからないだろう。

青い女 考えるから、わからなくなるのよ。

白い男 わからないから、考えるんだよ。

青い女 だから、そもそも考えなきやいいじゃない。

白い男 そんなの無理だよ。

青い女 なんで？

白い男 だって考えないようにしようって考えてる時点で、も

うすでに考えてる事になる。

青い女 そんなの屁理屈でしょ。

白い男 とにかく私には無理だ。

青い女 ねえ！ もうわかっているじゃないの、自分のこと。

白い男 え？

青い女 あなたが求めてるのは、考えるってことなんだよ。

白い男 考える？

青い女 それを手に入れようとしてるんじゃない？

白い男 言われてみればそんな気もする。

青い女 だから、考える事をやめられない。

白い男 なんだそうだったのか。

青い女 簡単なことよ。

白い男 ありがとう、お陰でなんだかスッキリしたよ。

青い女 いいえ、どういたしまして。

白い男 ライター一ついただこうかな。

青い女 買ってくれるの？

白い男 ああ。幾ら？

青い女 十個で三円。

白い男 安いね。

青い女 でしょ？

白い男 それで一個だと幾らになるの？

青い女 さあ？ 十個三円。

白い男 間違い、なんじゃないの？

青い女 なにが？

白い男 だって安いでしょ？ 十個三円は。

青い女 でしょ！ 苦労したわ。経費節減でこの価格を実現し

たの。

白い男 なるほど。じゃあ、三円で一個を売ってよ。

青い女 どうして？

白い男 十個もいらなから。

青い女 でも多い分には困らないでしょ？

白い男 困るよ。

青い女 遠慮することないのよ。

白い男 そっちこそ遠慮してるんじゃないの。

青い女 あたしが？

白い男 普通、一個三十円でも買うよ。

青い女 三十円って！ それじゃあポツタクリじゃないの。

白い男 いや、そんなことないから。

青い女 じゃあ十個だと三百円じゃない。

白い男 それでも安いくらいだよ。

青い女 でもそんないきなり高くして大丈夫かしら？

白い男 今までが安すぎたんでしょ。

青い女 あっ！……気がつかなかった。

白い男 本当？

青い女 うん。だって安い方がいいと思っただから。

白い男 限度ってものがあるでしょ。

青い女 どうして気づかなかったんだろう。

白い男 まあ、買う方からすれば安い方がいいのも確かだから。

青い女 もしかして……あたし何も考えてないからかもしれない。

い。

白い男 そういう事じゃないと思うけど。

青い女 どうしよう。あたし考えなきゃ！

白い男 大丈夫だよ。もう、考えてるから。

青い女 え？

白い男 だってホラ！ 今、考えなきゃって考えてるんだから。

青い女 嘘。じゃあ、あたし考えてるんだ。

白い男 誰だって考えてるんだよ。

青い女 よかった。

白い男 あれ？ ちょっと待てよ……私の求めているのは考える

ことだったよな。

青い女 ええ、そうね。

白い男 求めていることは……まだ手に入れてないって事だ

ろ？

青い女 そうなるかしら。

白い男 さつき誰だって考えてるんだよって言ったよ……自分

で。

青い女 言っただわね。

白い男 じゃあ、別に求める必要ないのか！

青い女 でも、だったら何を求めているの？

白い男 えっ、それは……さあ、何だろう？

青い女 何か求めているんでしょ？

白い男 そうだな、何かを求めているのは確かだ。

青い女 それが何なのか、わからないのね。

白い男 あなたは何を求めているの？

青い女 あたし？

白い男 聞かせて、何？

青い女 幸せよ、決まっているじゃない。

白い男 幸せか……具体的に言うとなんなの、お金？

青い女 まさか！ お金なんかあったって幸せとは限らないわ

よ。

白い男 じゃあ、どういうこと？

青い女 どういうって……心が満たされるってことなんじゃないの？

白い男 心が。何で満たされることなの？

青い女 まあ、愛かな。

白い男 だったら求めているのは、幸せじゃなくて愛？

青い女 あつ、そっか。

白い男 英語で言うところのラブだね。

青い女 いや、違う！ そっじゃない！ 愛なんかより幸せに  
なりたい。

白い男 どう違うの？

青い女 愛ってさ、相手がいないと成立しないけど。幸せってのは、一人でもなれるんじゃないかな。そんな気がするんだよね。

白い男 なるほど。

青い女 あんた今、幸せ？

白い男 どうして？

青い女 いや、なんとなく。

白い男 さあ、わかりません。

青い女 わからないの？

白い男 それが何なのか、わかりません。

青い女 なるほど。

白い男 ねえ……一人で平気なんですか？ それでも幸せになれるんですか？

青い女 なれるわよ。

白い男 寂しくないんですか？

青い女 なにそれ。

白い男 え？ なにそれって、寂しさをしらないんですか？

青い女 だって、あたしは青い女。心の底まで青いんだ。

黒い子供、赤い靴を片方持って走り去る。

赤い老婆が、その後を追って現れる。老婆は靴を片方しか履いていない。

赤い老婆 ああつ！ なんなんだいまったく！ すばしっこい

ガキだね。あんた達、あの腹黒いガキを追いかけてくれよ！

白い男 あの子をですか？

赤い老婆 なにポッーとしてるんだい。あたしの靴を引った

くって行っただよ！

青い女 片方だけ？

赤い老婆 見ればわかるだろ！ ほら、あんた早く追いかけてくれよ。

白い男 わかりました。

白い男、追いかけて去る。

赤い老婆 まったく驚いちゃったよ、噂には聞いてたけど。靴

まで引つたくるなんて、まったく世知辛い世の中になったもんだ。

青い女 本当お婆ちゃん、ひどい目にあったわね。

赤い老婆 お婆ちゃんって、誰のこといつてんだい？

青い女 ごめんなさい。そうよね、まだまだお元気そうだもの、お婆ちゃんなんて歳じゃなかったわね。

赤い老婆 もしかして、あんたライター売りがい？

青い女 ええ、そうよ。一ついかが？

赤い老婆、片方だけ履いていた赤い靴を、青い女に投げつける。

赤い老婆 この人殺し！

青い女 何するのよ！

赤い老婆 ライターなんか売るから、あの子は死んだんだよ！

青い女 あのマッチ売りが死んだのは、あたしのせいじゃないよ！

赤い老婆 よくもぬけぬけとライターなんか売れるね。

青い女 うるさいわね！これがあたしの商売なんだよ。

赤い老婆 あんたの商売つてのは、人を凍え死にさせることかい？

青い女 これだよ！これ。このライターを売るんだよ。

赤い老婆 あの子はね、あたしに夢を見させてくれたんだ。あ

たしの夢を返しとくれ。

青い女 夢？……あの子ってマッチ売りのことかい？

赤い老婆 あの子が売っていたのは夢さ、マッチじゃない。

青い女 あんた一体なんなの？

赤い老婆 あたしや、あの子の孫だよ。

青い女 孫って、なに言ってるの？逆じゃないの？

赤い老婆 あの子は、お婆ちゃんのいないあたしのお婆ちゃんになつてくれたんだよ。

青い女 え？だから、どう見たつてあんたがお婆ちゃんじゃ？

赤い老婆 まったく何回言えばわかるんだい？あたしが孫なの！

青い女 この人、ぼけてるのかな。

赤い老婆 ぼけてるのは、そっちだろうが。

白い男が戻ってくる。

白い男 ……見失いました。

赤い老婆 なにやってんだい、この役立たずが！

白い男 すみません。

青い女 あんたが謝ることないよ。

赤い老婆 ちよっと、ボケっとしてないでさっさと靴ぬぎなよ！

白い男 わたしですか？

赤い老婆 そうだよ！ 見てわからないのかい？ あたしに裸足であるけつてのかい？

白い男 じゃあ、家までおぶつて行きますよ。ね、お婆ちゃん。

青い女 よしなよ、ほっときな。

白い男 どうして？

赤い老婆 ちよつと！ お婆ちゃんつて、もしかしてあたしの

ことかい？

白い男 ええ、困った時はお互い様ですから。

赤い老婆 そんなことしてもらわなくつても、自分の足でも歩けるよ。さつさとその靴を脱ぎなよ。

白い男 いや、私だつて……それは困ります。

赤い老婆 困った時は、お互い様じゃなかつたのかい？ 大体

あんたがさつきのガキを捕まえていりゃあこんなことにならなかつたんだよ。

白い男 まあ、それはそうですが。

青い女 こんな婆さんほっときなよ。

赤い老婆 人殺しは黙つてな。

青い女 おい、ふざけるのもいい加減にしなよ！

白い男 まあまあ、相手は年寄りなんだから。

赤い老婆 年寄りじゃないつて言つてるだろ！ この間抜け。

白い男 間抜けつて、私のことですか？

赤い老婆 当たり前だろ！ あたしや急いでるんだ。早く靴、

脱ぎなよ。

白い男 はあ。

青い女 きつともうボケてるんだよ。相手にすることないよ。

白い男 でも、どうしよう、困つたな。

赤い老婆 おい！ ちよつとあんた、肩車しとくれよ。

青い女 肩車？

白い男 どうしたんですか？ おんぶは嫌がつてたのに。

赤い老婆 いいから！ 早く肩車しとくれよ。

白い男 わかりました。

青い女 やめなよそんなこと。

赤い老婆 ホラ早く！

白い男 はい。

白い男、赤い老婆を肩車する。

白い男 よいしょつと！

赤い老婆 あの木が邪魔なんだよ！ もっとそつちによつて！

白い男 そつちですな。

赤い老婆 早く！

青い女 何？

赤い老婆 ああつ。

白い男 何が見えるんですか？

赤い老婆 ……煙、火葬場の。

白い男 火葬場？

赤い老婆 間に合わなかったか……もういいよ、おろしとくれ。

白い男 ええ。

青い女 ねえ、もしかして……。

白い男 赤い老婆をおろす。

赤い老婆 ああ。あの子が焼かれる……煙さ。

白い男 あの子って？

青い女 マッチ売り。

白い男 えっ、でもそんなすぐに？ だって今朝ですよ亡く

なったのは。

赤い老婆 何いってんだい、もう四日はたつよ。

白い男 四日？

赤い老婆 空に登っていく、あたしのお婆ちゃんが。

白い男 お婆ちゃん？

青い女 この人、あのマッチ売りの孫なんだって。

白い男 孫って。

赤い老婆 疲れちゃった、何もかも……イヤになった。

青い女、鳥かごを置いて青い靴を脱ぐ。

白い男 ああ。

青い女 ほら、使いなよ。

赤い老婆 何のまねだい？

青い女 履きなよ、サイズも大体同じだろ。

赤い老婆 ……あんた。

黒い子供が走ってくる。青い女の靴を片方取り、来た方へ  
また走り去る。

青い女 え？

白い男 あっ！

赤い老婆 追っかけて！ 早く！

白い男 ええ！

白い男、黒い子供を追いかけて去る。

青い女、赤い老婆の片方靴と、自分の靴を拾って。

青い女 なんなんだ？ あの子供。

赤い老婆 噂になってるだろ、黒い子供っていう靴泥棒さ。

青い女 仕方ないのに、片方だけ盗んだって。

赤い老婆 そうだね。でもそれ、ひと組になってるじゃないか。

青い女 ああ本当だ。左右かたつぽずつだから履けないことな  
い。

赤い老婆 裸足じゃ冷たいだろ、あんた履きなよ。

青い女 別に冷たくないよ。言つとくけど同情とかじゃないから。

赤い老婆 わかつてるよ、そんなこと。

青い女 子供の頃、カナリアを飼ってたんだ。ホラあのカゴで。

赤い老婆 カナリア？

青い女 今日みたいな寒い日だった、朝起きたら死んでた。

赤い老婆 そうかい。

青い女 ずっと忘れてたけど、さつき思い出した。

赤い老婆 カナリアか。

白い男が黒い子供を捕まえて戻ってくる。

白い男 今度は逃がしませんでしたよ。

赤い老婆 おお！ でかした。捕まえたね。

白い男 でも、靴が。

青い女 あたしの靴は？

白い男 それが向こうの川に投げ込まれちゃって。

青い女 川に？

赤い老婆 じゃあ！ あたしの靴も？

白い男 おそらくそうでしょうね。

赤い老婆 なんてそんなこと、どういふつもりだい。

黒い子供 臭かったから。

白い男 え？

赤い老婆 なに言ってるんだい！ あたしのは臭くないよ！

青い女 あたしのだって！

黒い子供 もう逃げないから放してよ。

白い男 本当か？

黒い子供 僕、嘘つかないよ。それ(靴)嗅いでみればいいじゃないか。

青い女 えつ、これ？

白い男 ああ、そっか。

黒い子供 凄いから。

白い男 本当？

赤い老婆 嘘に決まってるだろ！ その女はともかく、あたし

のは臭くないよ。

白い男 ですよね。

青い女 ですよねって、どういうこと！

白い男 だって。

青い女 嘘だと思ふなら嗅いでみなさい！

白い男 いや、別にそんな。

赤い老婆 あたしのはやめとくれよ！ あんたこっちに返して

くれよ。

青い女 あつ！ 臭いんだ！ 嗅がせたくないって事は凄く臭

いんだ！

赤い老婆 臭くないって！ いいから早くよこしなよ。

青い女 いやだよ！

赤い老婆 畜生！返せってば！

白い男 ちよつと二人とも！

赤い老婆 やっぱりひどい女だった！この人殺し！

青い女 あんたホラ、これ。

青い女、赤い老婆の靴を白い男の方に投げ、赤い老婆を押さへつける。

白い男 え？

青い女 早く！嗅いで。

赤い老婆 ちよつと、なにするんだい！駄目だよ！

白い男 あの、どうしよう。

黒い子供 嗅げば。

赤い老婆 放せ！あたしのだけ嗅ぐなんて不公平じゃない

か！

青い女 うるさい、黙ってなよ。

白い男 でも、そうですよ。これじゃ不公平ですよ。

黒い子供 僕もそう思う。

赤い老婆 そうだろ！嗅ぐんならこの女のも嗅いでくれよ。

白い男 はい。

青い女 バカ！いいの。あたしのは、臭くないから。

赤い老婆 だったら嗅がせていいじゃないか。

青い女 それは、そうだけどさ。

白い男 その靴も貸して下さい。

青い女 わかったよ……ホラ。

青い女、自分の靴を白い男に向かって投げる。

白い男 どうも。

青い女 好きにすれば。

白い男 じゃあ。

黒い子供 僕のも嗅いで。

白い男 え？

黒い子供 だって不公平だよ。

赤い老婆 ああ、そうだね。

青い女 靴、脱ぎなよ。

黒い子供 うん。

黒い子供、黒い靴を片方脱ぐ。

白い男 ねえ、ちよつと。君は、いいよ。

黒い子供 どうして？

白い男 どうしてって。

青い女 そうしなきゃ不公平だろ。

白い男 でも。

赤い老婆 もともと悪いのはそいつなんだよ。

白い男 そうかもしれないけど。だってアレでしょう？

赤い老婆 あれって？

白い男 いや、だから。

青い女 もしかしてあんた、あたし達の靴を嗅ぐのが嫌なん

じゃないの？

白い男 別にイヤじゃないですけど、いい気持ちはしてないのは確かです。

赤い老婆 せっかぐ嗅がせてやるって言うてるのに、そんな言いくさはないだろう。

白い男 誰だって他人の履いてた靴なんて嗅ぎたくありませんよ。

青い女 じゃあ、自分のだったらいいの？

白い男 自分のって。

青い女 足とか、かなり臭そうだね。

白い男 私ですか？

赤い老婆 きつとこの中で一番臭いよ。

白い男 そんな！ そりゃ多少は、におうかもしれないですけど。

青い女 とにかくこういうことは、公平にしなきゃ。

赤い老婆 そうだよ！ あんたの靴だけ嗅がないのは不公平だよ。

白い男 ちょっと待って下さい。もともとそういうことじゃなかったでしょ？

青い女 何が？

白い男 この子が嘘ついてるかどうかっていうことで。

黒い子供 僕、嘘なんかついてないよ。

白い男 うん、だからこれからそれを確かめるためにさ。

赤い老婆 ごちゃごちゃ言つてないで、さっさと脱ぎなよ。

白い男 だから私の靴は関係ないですから。

青い女 関係あるよ、だってあんたがあたし達の靴を嗅ぐんだ

から。

白い男 じゃあ別に、私が嗅がなくても。

青い女 あんた以外に誰が嗅ぐんだよ。あたしたち三人は立場的に嘘つくかもしれないだよ。ホラ、早く脱いで。

白い男 待って下さいよ。

赤い老婆 いいじゃないか靴をちょっと嗅ぐくらい。

白い男 勘弁してくださいよ。

青い女 なんでそんなに嫌がるの？ なにか別の訳があるの？

赤い老婆 別の訳って？

青い女 だって、たかが靴のニオイを嗅ぐだけなのにこんなに嫌がるなんて少しおかしいと思つて。

赤い老婆 ああ、そう言えばそうだね！

白い男 そんなこと、なにもないですから。

赤い老婆 なんだろうね？

青い女 うーん、靴を脱げない訳かあ。

白い男 ちょっと本当に訳なんて、なにもないですから。

赤い老婆 洒落にならないくらい臭いんじゃない？

青い女 そんなんじゃない普通すぎない？

赤い老婆 まあね。

黒い子供 逆に、いい匂いとか。

赤い老婆 いい匂い？ 足が？

黒い子供 うん。

白い男 そんなバカな。

青い女 でも、それだったら嫌がる必要ないじゃない。

黒い子供 いい匂いだと、皆に嗅がせてって言われそうでヤダ

でしょ？

青い女 ああ、なるほど。

赤い老婆 まさかそんな事はないだろう。

白い男 ええ、そんなことはないです。

青い女 でもさ、ニオイって人によって感じ方がけっこう違う

じゃないの。

赤い老婆 感じ方って？ 例えば。

青い女 例えば、納豆のニオイって納豆好きな人は気にならな

いけど嫌いな人は凄く臭く感じるじゃない。

赤い老婆 香水の匂いとかで気持ち悪くなる人もいれば、同じ

匂いでうっとりしちゃう人もいるしね。

青い女 そう！ そういうこと。あなたどうなの？

白い男 どうって？

青い女 足に決まってるでしょ。

赤い老婆 どっちかって言うと納豆？ それとも香水？

白い男 どっちでもないですよ。

赤い老婆 ちよつと、どっちが近いかわからない言いなさいよ。

白い男 わかりません。

赤い老婆 嘘、自分の靴の匂いぐらいわかりそうなものじゃない。

い。

白い男 どんな匂いでもいいじゃないですか。

赤い老婆 よくないわよ。

青い女 ねえ、あなた自分の靴を改めて嗅いでみたことある？

白い男 え？……ないですよ。

青い女 じゃあ！ チャンスじゃない！ ちゃんと確認するとき

なさいよ。

白い男 そんな必要ないですから。

赤い老婆 めんどくさいから、みんなで押さえつけて腕がしち

まおうか。

青い女 そうだね、弱そうだから腕がせられる。

白い男 ちよつと暴力はいけませんよ。

赤い老婆 だって仕方ないだろう。あんたがグズグズしてるん

だから。

青い女 やるときは手加減しないから。

白い男 わかりました脱ぎます、脱ぎますから手荒な事はしな

いで下さい。

赤い老婆 おお、やつとその気になったか。

白い男 じゃあ、脱ぎますよ。

白い男、白い靴を片方脱ぐ。

白い男 あの、やっぱり……。

赤い老婆 どうしたんだい？

白い男 いえ。

青い女 嗅ぎな。

白い男 ……はい。

白い男、白い靴の匂いを嗅ぐ。

黒い子供 嗅いでる。

白い男 ……ああ。

青い女 どう？

白い男 何も匂いませぬ。

赤い老婆 本当に嗅いだのかい？

白い男 嗅ぎましたよ。でも、自分でも意外でした。

赤い老婆 意外って何が？

白い男 いや、実はかなり臭いんじゃないかって予想してたの  
で。

赤い老婆 へー、そうだったの。

白い男 はい。ああ、でもこの結果はある意味シヨックです。

赤い老婆 どうして？

白い男 やっぱりは自分の事を何もわかってないんだなって。

青い女 でもよかったじゃない、臭くなかったんだから。

白い男 よくないですよ！ 誰かマッチ！ マッチ持ってませ  
んか！

赤い老婆 マッチ？

白い男 ええ！ 私は自分の事をもっとよく知る必要があるん  
です。だからマッチがいるんです。だからマッチマッチ！

赤い老婆 なに？ どうしたの？

白い男 ああっ！ マッチ！

青い女 ちよつと落ち着きなさいよ。

白い男 駄目だ！ 不安なんだ！ 頭の中まで白いんだ。

青い女 白い？

白い男 私は白い男なんだ！ 誰かマッチ！ マッチをくれ！

赤い老婆 持っていないよ。

黒い子供 僕、持ってるよ。

白い男 本当か！

黒い子供、ポケットからマッチをひとつ出す。

白い男 マッチだ！

赤い老婆 おや、そのマッチ。

白い男 かせ！

黒い子供 かわり何かくれよ。

白い男 何かつて？

黒い子供 それ(脱いである靴)と交換ね。

白い男 靴と？

黒い子供 じゃあ。いくよ、ホラ。

黒い子供、白い男にマッチを投げる。

白い男 やった！ マッチだ。

赤い老婆 ちよつと！ そのマッチ見せて。

白い男 ヤダよ。

赤い老婆 よこせつてば！

白い男 (マッチ箱を開ける) おい！ これ、カラじゃないか。

赤い老婆 貸して！

赤い老婆、白い男からマッチを奪う。

赤い老婆 やっぱりそうだ。

白い男 騙したのか？

黒い子供 うん、そうだよ。

白い男 そうだよじゃないだろう、なんだよもつ。(へたり込む)

赤い老婆 ねえ、このマッチあの子から買ったのかい？

黒い子供 あの子つて？

青い女 マッチ売りの少女。

赤い老婆 どうなんだい？

黒い子供 拾ったんだ。

赤い老婆 拾った？

黒い子供 うん。じゃあね、バイバイ。

黒い子供、白い男の靴を片方持つて川の方に走り去る。

白い男 あつ、待つてよ！ お前インチキじゃないか。おい！

私の靴！

白い男、黒い子供を追つて去る。

赤い老婆 お婆ちゃん。

青い女 それ、あのマッチ売りが売つてたマッチかい？

赤い老婆 あの子が売つていたのは夢だよ。

青い女 あんたの言う夢つてのは、使つちまうと空っぽになるんだね。

赤い老婆 え？……ああ、そうさ。

青い女 空っぽの夢か。

赤い老婆 空っぽでもないよりましさ。

青い女 あいつの頭の中もそんな感じなのかな。

赤い老婆 あの煮え切らない役立たずかい？

青い女 頭の中が白いつてどういうことだろう？

赤い老婆 さあね、そんなことあたしの知ったこっちゃないよ。

青い女 あんたの頭の中は、どうなの？

赤い老婆 あたしのは……赤いね。

青い女 なるほど。

赤い老婆 何が、なるほどなんだい？

青い女 ねえ。あのマツチ売りは。あんたのお婆ちゃんは、あ

んたにどんな夢を？

赤い老婆 あの子とは三回逢った。

青い女 たった三回？

赤い老婆 最初に逢ったのは春だった。あの子はあたしの孫

だった。

青い女 孫？

赤い老婆 次は夏。あの子は、あたしの母さんだった。

青い女 母さん。

赤い老婆 最後に逢ったとき、あの子はあたしのお婆ちゃんに

なった。その時、季節は秋だった。でも冬になって、あの子

は死んでしまった。

青い女 一度だけ……あのマツチ売りと話したことがあるんだ。

赤い老婆 あの子と？

青い女 このあたしにマツチを買ってくれて言ってきた。

赤い老婆 買ったのかい？

青い女 まさか。そういえばあの時、あたしの娘だとか変な事

を言ってたな。

赤い老婆 あんた夢を買い損ねたね。

青い女 夢を？

赤い老婆 でも、もうあの子は死んじまった。

青い女 誰にでも、そうしてたのかな？

赤い老婆 優しい子だったからね。

白い男が戻ってくる。

白い男 やられました。

赤い老婆 あのガキは？

白い男 私の靴も川に。

赤い老婆 そりゃいいや！

青い女 きつと臭かったんだよ。

赤い老婆 あはははっ、まあそういう事だろうね。

白い男 笑いごとじゃないですよ、一体なんなんですかね？

赤い老婆 さあね、知らないよ。

白い男 さつき捕まえた時に、もつとちゃんと叱っておくべき

だった。

赤い老婆 ああいうガキは、叱ったって聞きやしないよ。

白い男 でも誰かが言わないと。叱らないよりマシでしょう。

赤い老婆 どうだかね。

白い男 ああ、それにしても疲れた。靴片方だとすぐ走りづ

らい。

青い女 脱げば良かったのに。

白い男 見失うと思って。まあ、結果的に見失ったわけですから。  
ど。

赤い老婆 やっぱり役立たずだね。もっと頭を使いなよ。

白い男 ほつといて下さい。

青い女 ねえ、あんたあのマツチ売りに逢ったことある？

白い男 ええ、ありますよ。

青い女 その時マツチは買わなかったのかい？

白い男 買いました。

赤い老婆 買ったのかい？ あの子はあんたの何になった？

白い男 何って、なんですか？

青い女 娘とかお婆ちゃんとか。

白い男 どういうことですか？

赤い老婆 答えなよ、あんたの何かになつたらう？

白い男 え？ 別に何も。

赤い老婆 何も？

白い男 あの、言ってることがよくわからないんですけど。

赤い老婆 本当に何にもならなかったんだね。

白い男 ええ、たぶん。

青い女 でも買ったんだよね、マツチを。

白い男 はい。

青い女 誰にでもそうしてた訳じゃないんだ。

赤い老婆 あの子は……こいつにはマツチを売ったんだ。

青い女 マツチを？

白い男 え？ さっき私そう言いましたよね。

赤い老婆 この男にはどうしてマツチを売ったんだらうね？

白い男 そりゃ売るでしょう、だってマツチ売りなんだから。

青い女 相手を選んでたのかも。

赤い老婆 こいつには、夢を売りたくなかったんだ。

白い男 夢？ どういうことですか夢を売って。

赤い老婆 あの子はあたしに夢を売ってくれてたんだ。

白い男 マツチじゃなくて夢？

赤い老婆 ああ、夢だよ。

白い男 そんなのどうやって売るんです？

青い女 あたしが売ってやろうか？

赤い老婆 (青い女に) あんた。

白い男 私にですか？

青い女 そうだよ、あんたに売ってやるよ。

白い男 どんな夢ですか？

青い女 青い夢だよ。

白い男 青い？

青い女 どうする？ 買うの？ 買わないの？

白い男 ……買います。幾らですか？

青い女 十個で三円。

赤い老婆 やすっ！

白い男 十個もですか？

青い女 何よ？

白い男 十個って……そんなにたくさん？ だって夢ですよ。

青い女 たくさんあつても困らないでしょ。

白い男 いや、でもなんだか有り難みがないでしょ？ そんな

にあると。それに安すぎますよ。

青い女 やすい方が、いいじゃない。

白い男 大丈夫なんですか？ ちゃんとした夢なんですよ？

青い女 なに？ 疑ってるの？

白い男 いえ！ そういう訳じゃないですけど。

青い女 じゃあ、どういう訳？

白い男 夢って、普通は幾らぐらいなんですかね？ やっぱり

適正価格があるはずでしょう？

青い女 そんなの知らないわよ。

赤い老婆 あの子は一個十円で売ってたよ。

青い女 高くない？

赤い老婆 あたしは、それでも安いと思うけどね。

白い男 十円か。

青い女 一個十円だとすると十個で百円ね。

白い男 だから私は十個もいりませんから。

青い女 あなたライターの時と同じこと言ってるわよ。いっと

くけど夢とライターは違うのよ。わかってるの？

白い男 わかっていますよ！

青い女 夢はたくさんあつても邪魔にはならないのに。

白い男 一個あれば充分です。

青い女 本当に一個でいいの？

白い男 はい。一個ください！

青い女 かしこまりました。

青い女、鳥かごから青いライターを一個出して白い男に渡

す。

青い女 はい、どうぞ。

白い男 あ、ちよつと。

青い女 十円です。

白い男 何のつもりですか？

青い女 何か？

白い男 これライターじゃないですか。

青い女 ライターじゃなくて夢よ。

白い男 こんなのにいりませんよ。

青い女 いらなの！ どうして？

白い男 だってタバコも吸わないし、使わないですから。

青い女 夢はね。持ってれば、きつといつか役に立つよ。

白い男 そもそも夢は売ったり買ったり出来るわけがないんで

す。

赤い老婆 そんなことないよ！

白い男 あなた方は、ただこのライターを夢って呼んでるだけじゃないですか。

青い女 あんたには、この夢がライターに見えるのかい？

白い男 当たり前でしょう！ライター以外のなものでもありませぬよ。

赤い老婆 まったく呆れたね。

白い男 はい？ 呆れたのはこつちですよ。

青い女 おい！ あんた。それが夢じゃないとしたら何が夢なんだい？

白い男 何がって？

青い女 だから、それじゃないって言い切るからには、あんたは何か他のモノの事を言ってるんだらう。

白い男 知りませぬよそんなこと！ 夢なんてモノは形のないものなんですから。

赤い老婆 形のないモノ？ あんた夢を見たことないのかい？

白い男 夢ぐらい……見ますよ。寝てる時とか。

赤い老婆 バカだねあんた、あたしが言ってるのはそういう夢の事じゃないよ。

白い男 じゃあ、なんなんですか！

赤い老婆 あるじゃないか目の前に。

白い男 目の前？

青い女 だから、それが夢だよ。

白い男 これが？……でもこれはライターですよ。

青い女 あんたさつき、自分が何を求めているのかわからないって言ってたよね？

白い男 ええ、わかりません。

赤い老婆 あつ！ だからだよ！ それじゃあ仕方ないよ。

白い男 何がですか？

青い女 かわいそうに、夢がライターにしか見えないなんて。

赤い老婆 まあとにかくさ。あんた騙されたと思って、その代金払ってみなよ。

白い男 いや、でも。

青い女 ちよつと！ あたしは騙したりしないよ！

赤い老婆 え？ ああ、そうだよ。じゃあ、騙されてないと思つて払いなよ。

白い男 それって……結局、騙されるってことじゃないんですか？

赤い老婆 そんなことないよ！……え？ ああ、そつか、あたしの言ってること変だったね。

青い女 営業妨害ならあつちに行つてくれよ。

赤い老婆 とんでもない！ あたしやあんたに協力しようと思つて。

白い男 協力？ あつ！ やつぱりあんた達二人で私を騙すつもりだったんですね。

青い女 違つよ！

赤い老婆 そうだよ！ そんなわけないよ。

白い男 とにかくこのライターは返しますから。

青い女 知らなかったのかい？ 夢つてのはね、返品が効かないんだよ。

白い男 もう、ふざけるのもいい加減にして下さい！

青い女 勘弁してくれよ。ふざけてるのは、そつちじゃないか！

白い男 まったくこれじゃあタチの悪い押し売りですよ。

青い女 人聞きの悪いことを言うんじゃないよ。

赤い老婆 まあまあ、二人とも落ち着いて。

青い女 落ち着いてなんていられないよ！ あいつ、人のことを夢の押し売り呼びわりして。

白い男 だって、そうじゃないですか！

赤い老婆 ちょっと、待ちなよ！ じゃあ、あたしがあなたの代わりに払うよ。

白い男 え？ 払うって、この人にですか？

赤い老婆 柄にもなく可哀想になっちまってさ、あなたのことが。

白い男 どうして？

赤い老婆 夢がライターにしか見えないなんて可哀想だよ。

白い男 別に可哀想じゃないですよ。

赤い老婆 (青い女に) いいだろ、この人のかわりにあたしが払ったって。

青い女 あんた見かけによらずいい人なんだね。(白い男に)あ

んだこの人に感謝しなよ。

白い男 いや、私は別に。

赤い老婆 十円だったね。

青い女 そう、十円です。

赤い老婆、ポケットから十円を出して青い女に渡す。

青い女 ありがとうございます。領収書はどうしますか？

白い男 領収書？

赤い老婆 貰っとくよ。宛名はそつだねえ……赤い老婆でお願い。

青い女 はい、少々お待ち下さい。

青い女、ポケットから紙と鉛筆を出して領収書を書き始める。

白い男 老婆って、お婆ちゃんて呼ばれるのあんなに嫌がって

たのに。

赤い老婆 自分で言う分には、かまわないんだよ。

白い男 はあ。

青い女 すいません、ろうばっていう漢字がわからないんですけど。

赤い老婆 (白い男に) あんた、わかるかい？

白い男 さあ？ わかりません。

赤い老婆 仕方ないね、ひらがなでいいよ。

青い女 はい。じゃあ、ひらがなで「ろ・う・ば」つと。お待ちせしました。

青い女、赤い老婆に領収書を渡す。

赤い老婆 ああ。それじゃ、あたしは行くよ。

白い男 行くとどこに？

赤い老婆 家に決まってるのだろ。

白い男 あの、じゃあこのライター持っていつて下さい。

赤い老婆 え？……あんた、なんなんだい？ せっかくあたしが買ってやったのに。

青い女 そうだよ！ 有り難くもらいなよ。

白い男 いや、でも。

赤い老婆 人の親切は、素直に受け取るもんだよ。

白い男 わかりました。じゃあ、一応もらっておきます。

赤い老婆 一応ってなんだよ？

白い男 あつ、すいません。有り難く頂戴します。

赤い老婆 本気でそう思ってるかい？

白い男 思ってますよ。

赤い老婆 ふん。まあいいや、じゃあね。

白い男 はい。

赤い老婆 ああ。片方だけけど仕方ない履いていくか。

青い女 良かったら、あたしの使つてよ。

赤い老婆 いいのかい？

青い女 人の親切は素直にね。

赤い老婆 じゃあ、そうさせて貰うよ。

赤い老婆、自分の赤い靴と青い靴を、片方ずつ履く。

赤い老婆 ねえ、あんた。この男の何になるつもりだい？

白い男 私の？

青い女 何にもならないよ。

赤い老婆 あんた騙したのかい？

青い女 騙した訳じゃないよ。あたしはあのマッチ売りとは違うんだ。

赤い老婆 でも夢を売ったのは確かだろう？ 何かになりなよ。

青い女 そういつつもりで売ったんじゃないよ。

赤い老婆 じゃあ、一体どういつつもりなんだい？

青い女 あたしが売ったのは青い夢だ。

白い男 青いライターです。

青い女 この男はもう夢の中にいるんだ。ただその事に気づかないだけさ。

白い男 夢の中？

青い女 いつかこの夢に気づくまで、ただそばにいるよ。

白い男 そばって。

青い女 その外に出たとき初めて気づくことってあるだろう？

赤い老婆 言っていることが、よくわからないね。

白い男 私もわかりません。

青い女 あのカナリアが死んで、ずっと寂しさの中にいたか

ら……。

赤い老婆 寂しさか。

青い女 え？

白い男 いつ死んだんですか？ そのカナリアは。

青い女 なんでもないよ。いいじゃないか別に。

赤い老婆 まあ、そくだ。あたしには関係ないことだし。

青い女 またいつか逢おうね。

赤い老婆 ああ、その時はあたしにも夢を売っとくれよ。

青い女 どんな夢がいい？

赤い老婆 そうさね……赤いやつがいいね。赤い夢。

白い男 赤い夢？

青い女 赤い夢ならもう持つてるじゃないか。

赤い老婆 え？

青い女 そのマッチ箱さ。

マッチを擦る音がする。

黒い子供、自分の人差し指を見つめながら、ゆっくりと慎重に歩いてくる。

黒い子供は靴を履いていない。

白い男 あっ！ おい君！

黒い子供 しっ！ 静かにして！

白い男 え？ 静かになって。

赤い老婆 なに？ このガキ、何やってんだい？

白い男 指を見えますね。トゲでも刺さったのかな？

青い女 さあ？

黒い子供 虫だよ。ほら、赤い虫。

白い男 虫？

黒い子供 ここにいるんだ。

青い女 どこに？

黒い子供 凄く小さい虫だよ。

白い男 本当？

黒い子供 僕、嘘つかないよ。ホラ。

黒い子供の人差し指を取り囲み、それを見る三人。

白い男 あっ！ 本当だ。小さいなあ。

青い女 少し動いた。

赤い老婆 どこ？

青い女 いるじゃない、見えないの？

赤い老婆 わからないよ。

白い男 殆ど赤い点にしか見えなけれどよく見ると虫だな。

赤い老婆 そんな小さな虫がいるのかい？

白い男 いますよ。

青い女 これ、ダニじゃないの？

赤い老婆 ダニっ！

白い男 いや、違うよ。ダニにしちゃ小さいですよ。

黒い子供 ねえ、さっきのマッチ返して。

白い男 マッチ？

黒い子供 この虫、飼うから。

赤い老婆 そんなもん飼ってどうしようってんだい。

黒い子供 だって、可愛いんだもん。ねえ、マッチ返してよ。

白い男 そうだね。返してあげて下さい。

赤い老婆 イヤだよ。

白い男 どうして？

赤い老婆 もうこれは、あたしのだよ。あたしの赤い夢だ。

白い男 ただのマッチ箱ですよ。

赤い老婆 夢だつて言ってるだろ！（青い女に）ねえ、あんたそ

うだろ？

青い女 そうだよ。

赤い老婆 ほら、みなよ。

白い男 そうだとしても、もともとこの子が拾ったモノなん

ですよ。

赤い老婆 そんなこと知ったこつちやないね。あたしは、もう

帰るよ。

白い男 ちよつと待って下さいよ！

赤い老婆 放しなよ！

青い女 返してやれば。

赤い老婆 え？ あんたまで何を言うんだい？

青い女 どうせもう空っぽの夢なんだから。

赤い老婆 空っぽでもなんでもあたしには、これが必要なんだ

よ。

白い男 この子にだつてそれが必要なんですよ。

赤い老婆 そんなガキ。どうせまた、何か企んでるに決まっ

るよ。

白い男 そんなことないですよ！ 大体、この子がこんな風に

なつてしまったのは、私達大人の責任でもあるんですよ。

赤い老婆 まあ、あんた！ たいそうご立派な事を言うね。

白い男 だつて！（青い女に）そうだと思いませんか？

青い女 別に、あたしたちには関係ないだろ。

白い男 ありますよ！ とにかく折角この子が小さな命に興味

を持つたんですから、その事を大切に考えてあげて下さい。

赤い老婆 うるさいんだよ！ 関係ないって言ってるだろ。

白い男 ほら、見て下さいよ。あんなに一生懸命に見つめてい

るんですよ。

赤い老婆 え？

黒い子供、座り込んで人差し指の赤い虫を見る。

青い女 あんなモノ、よく飽きずに見てるね。

白い男 じつと見てると面白いですよね、私もアリの巣とか見始めると日が暮れるまでもみてしまいますから。

青い女 まったく、いい歳してアリの巣って。

白い男 いや、本当に飽きないですよ。

青い女 いいね、暇人は。

白い男 ああいうの見てると色々想像出来るんですよ。

青い女 想像ね。

白い男 あの子もきつと色々想像を膨らませてるんじゃないかな。

青い女 まあ、悪さするよりはマシか。

白い男 本当は優しい子なんですよ。

赤い老婆 ホラ、持っていくなよ。

白い男 いいんですか？

赤い老婆 あたしの気が変わらないうちに渡してやりな。(白い男にマッチを渡す)

白い男 はい、ありがとうございます。

白い男、マッチ箱を黒い子供に渡す。

白い男 君。これ、返して貰ったよ。

黒い子供 え？ ああ、うん。  
白い男 よかったね。

黒い子供、人差し指からマッチ箱に赤い虫を移し替える。

白い男 この虫も生きてるんだから、大事にするんだよ。

黒い子供 うん。ああっ、動いてる。

白い男 調べてるんだよ、こいつの新しい家だから。

赤い老婆 命が宿ったね空っぽだった夢に。

青い女 え？

赤い老婆 いや、なんでもないよ！

白い男 この中が気に入るといいね。

黒い子供 暖かいから気に入るよ。

白い男 そうだね。

青い女 でも、それダニだと思っよ。

白い男 違いますよ。

青い女 じゃあ、なに？

白い男 なにって……赤い虫ですよ。

黒い子供 ねえ、この虫どうして赤いの？

白い男 さあ？ それは。

青い女 ダニだからだろ。

白い男 ダニじゃないよ！

赤い老婆 血を吸うからね、ダニは。

黒い子供 血？

白い男 ダニが食べるのは血だけじゃないですよ、埃とかよく  
わからないゴミを食べてるんです。

青い女 でも、そいつは赤いんだからやっぱり血を吸ってるん  
じゃないかな？

白い男 どうしてそういうことばかり言うんですか！

青い女 あんた何怒ってるの？

白い男 だって、子供の夢を壊すようなこと言うから。

青い女 仕方ないだろ本当にダニなんだから。

白い男 違いますって。

黒い子供 じゃあ、なんていう虫なの？

白い男 ええっと、それは。

青い女 ダニだよ。

白い男 ちよっと！

黒い子供 ダニかあ、かっこいいな。

白い男 かっこいい？

赤い老婆 格好いいだって。

白い男 格好良くはないと思うけど。

黒い子供 名前つけなきゃ。

白い男 名前？ ああ、そうだね。

赤い老婆 せいぜい、格好いい名前つけなよ。

黒い子供 ええっと、どうしようかなー。あっ！ ダニールに

しようつと！

白い男 ダニールねえ。

赤い老婆 いい名前じゃないか。

白い男 そうかなあ。

黒い子供 おい、お前の名前はダニールだよ。わかったか？  
あれ？

白い男 どうしたの？

黒い子供 ダニールお腹空いたみたい。

白い男 いや、まだ大丈夫だよ。

黒い子供 でも段々と動きが鈍くなってるよ。

青い女 そんなことわかるの？

黒い子供 どうやって血をあげればいいの？

青い女 勝手に吸うんじゃない？ 指とかから。

白い男 駄目ですよ！ 変なこと教えちゃ。

青い女 別に変な事じゃないでしょ。

黒い子供 ご飯だよ、ダニール。

黒い子供、マッチ箱に指を突っ込む。

白い男 おい！ やめなさい！

黒い子供 どうして？

青い女 ほっときなさいよ。

白い男 だって、血を吸わせるなんて。

赤い老婆 でも、エサやらなきゃ死んじゃうだろう。

青い女 そうだよ、大事にしなつて言ったのあんたじゃないか。

白い男 言いましたけど、あんな事よくないでしょ？

青い女 いいじゃないか別に。

赤い老婆 ダニを飼うんだから仕方ないよ。

白い男 ねえ君。ダニールはダニじゃないから、そんな事して

も血なんか吸わないと思うよ。

黒い子供 もう、お腹一杯になつたみたいだよ。

白い男 え？ もう吸わせちゃつたの？

青い女 やつぱりダニだつた。

黒い子供 ホラ、また元気になつた。

白い男 嘘、見せて。

白い男、マッチ箱の中を見る。

白い男 ちょっと……大きくなつた気がする。

赤い老婆 きつと血を吸つたからだね。

黒い子供 うん。

赤い老婆 エサやるとき潰さないように気をつけなよ。

黒い子供 わかつてるよ。

赤い老婆 ダニのペットなんてちよつと変わつてるね。

白い男 でも、ダニなんて飼えるんですかね？

青い女 簡単そうだよ、血をちよつと吸わせるだけなんだから。

赤い老婆 犬みたいに散歩しなくていいし、なによりエサ代が

掛からないね。

青い女 結構なついて、そのうちなにか芸とか覚えたりしてね。

白い男 まさか、そんな。

青い女 ねえ、あんたはダニールと同じなんだよ。

赤い老婆 ダニと？

白い男 なんのことです？

青い女 夢だよ。あんたは、ダニールと同じなんだよ。

赤い老婆 へへ、ダニと同じ。

白い男 (青い女に) なに言つてるんですか？

青い女 このダニールは今、夢の中にいる。

黒い子供 夢？

白い男 またそんな話を蒸し返すんですか？ もう、いいです

よ。

青い女 いいの？

赤い老婆 よくないよ！ 面白そうだから黙つて聞きなよ。

白い男 別に面白くないでしょ。

赤い老婆 いいから！ ねえ、一体何が言いたいんだい？

青い女 ダニールは自分が今、夢の中にいるなんて気づいてい

ない。

白い男 え？

赤い老婆 まあ、そうだろうね。

青い女 あんたも夢の中にいるんだよ。そろそろ、その事に気

づいたかい？

白い男 もう冗談はやめて下さい。夢の中になんていませんよ。

青い女 ホラ！ ダニールとあんた、同じだろ？

赤い老婆 ああつ、なるほど。

白い男 こんなダニと一緒にはしないで下さい！ 違いますよ。

青い女 こんなダニだつて！

赤い老婆 人の大切なモノを、そんな風に言っちゃいけないね。

白い男 だつて！ ダニですよ。

黒い子供 ダニールだよ。

白い男 ああ、そうだったねダニールだ。ねえ、君だつておか

しいと思うだろ？ 私とダニールは、どう考えたつて違つて  
思うよね。

黒い子供 うん。僕だつてイヤだもん。こんな人とダニールが

同じだなんて。

白い男 おい！ こんな人はないだろう。

赤い老婆 あんたはダニール以下らしいね。

白い男 ねえ君、ちよつと待つてよ。私はダニール以下じゃな

いよ。

黒い子供 どうして？

白い男 どうしてつて……当たり前じゃないか、だつて少なく

とも私は人間なんだし。人間の方がアレに決まつてるよ。

赤い老婆 アレつて？

白い男 なんとなくわかるでしょ？ 私の言いたいこと。

赤い老婆 さあ？ あんたわかるかい？

青い女 わからない。

赤い老婆 ホラ、わからないつてよ。

白い男 あなた方は黙つててください！ 今、私はこの子と話

してるんですから。

黒い子供 僕もわからない。

白い男 じゃあ、わかるように説明するからね。

赤い老婆 凄いいえー、説明するんだつて。

青い女 無理だと思つよ。

白い男 もう、ゴチャゴチャうるさいなあ！

赤い老婆 あんた、何を怒つてるんだい？

白い男 誰だつて怒りますよ！ ダニ以下なんて言われたら。

青い女 でも、その子がそう思うのは勝手だろう。

白い男 そうかもしれないけど。

赤い老婆 いいじゃないか、別に。

白い男 よくないですよ！ いくらなんでもダニよりマシに決

まつてます。

赤い老婆 何を根拠にそんなこと言えるんだい？

白い男 だつて、私は人間ですよ！

赤い老婆 だから？ そんなの理由にならないね。

白い男 なりますよ！ 君だつて人間なんだから、そう思つた

ろ？

黒い子供 僕、人間だけで僕よりダニールの方が凄いと思つて

るよ。

白い男 どうして？

黒い子供 だって生きてるんだよ、こんなに小さいのに。

白い男 私だって生きてるよ！

黒い子供 でも小さくないから全然凄くないよ。

白い男 大きい方が凄くないか！

黒い子供 どうして？

白い男 ダニールはダニだから凄く原始的な生き物なんだ。で

も、人間は違う！ 遙かに複雑で進歩してるからいろいろ考  
えたり出来るじゃないか。そういうのって凄いだろ！ わ

かったかい？

黒い子供 わからない。

白い男 うーん。とにかく人間の方が凄いに決まってる！

黒い子供 誰が決めたの？

白い男 え？ ええつと、それは……。

青い女 人間だよ。

白い男 違いますよ！

青い女 じゃあ、誰？

白い男 それは、まあ人間以外の生き物です。

赤い老婆 人間以外の生き物だって！ 例えは？

白い男 例えは……このダニールだって人間って凄いなって

思ってるはずさ。

黒い子供 ダニールが？

赤い老婆 ええ？

白い男 だってダニールは人間の血とか吸って生きてるんだ  
ろ？

黒い子供 うん。

白い男 きっとダニールは君の事を、こんなに一杯血を吸わせ

てくれる人間で凄いなって思ってるはずさ。

黒い子供 ふーん。

青い女 別に凄いななんて思わないでしょ。

白い男 どうしてですか？

青い女 美味しいって思うだけじゃないの？

赤い老婆 ああ、そうだよね！

白い男 美味しいって、そんな。

青い女 あんただってなにか食べて、そのことを凄いとは思

わないでしょ？

白い男 たまには思う事だってありますよ。

赤い老婆 凄い！ 美味しいとかね。

白い男 いや、そういうことじゃなくて！

黒い子供 僕のこと美味しいって思ってるのか。

白い男 思っていないよ！ そもそもダニールはそんなことい

ろる気にしてないよ。美味しいとかマズいとか、そんなこと

はわからないんだよ。

黒い子供 わからないの？

赤い老婆 まあねえ、どうだかね。

白い男 だってホラ！ 血を吸うから、たぶんダニールの口は

ストローみたいな筒状になつてはすだろ。だからそもそも味を感じるペロがないんだ。

黒い子供 ふーん。

白い男 原始的な生き物だから下手すると、目とか鼻もないかもしれないよ。

黒い子供 耳は？

白い男 たぶん……ないんじゃないかなあー。

黒い子供 でも生きてるんだよね？

赤い老婆 まあ、生きてるね。

黒い子供 うわあー、凄いなあダニールって。

白い男 なんて？

黒い子供 だって口しかないのに生きてるなんて絶対凄いや！

赤い老婆 そうだね凄いや！

青い女 よく生きてるね。

白い男 ちよつと待って！ 間違えた。いくらなんでも口だけってことはないよね。訂正します！ 目はあつたような気がする。

黒い子供 目はあるの？

赤い老婆 それでも凄いや。

青い女 そうだよね。

白い男 いや、私も確かなことはわからないんだけど、こういう生き物は鼻とか耳がなくてもそれに代わる何かはあるんじゃないかな。

黒い子供 何かつて？

白い男 なにか敏感な毛みたいなモノ。

黒い子供 毛？

青い女 触覚みたいなモノでしょ？

白い男 ああ、そう！ たぶんそんな感じのモノ！

黒い子供 ふーん。

白い男 だから目とか口以外に、そういうモノがないわけじゃないんだよ。

黒い子供 じゃあ、凄くないんだね。

白い男 まあ、人間よりはね。仕方ないよ、だってダニールはダニなんだから。

黒い子供 ふーん、つまらないの。

黒い子供、ダニールの入ったマッチ箱を置き、足で踏んづけようとす。

青い女 あつ。

赤い老婆 ちよつと！

白い男 危ない！

白い男、黒い子供を突き飛ばしマッチ箱を拾い上げる。

白い男 びつくりしたなあ、なにするんだよ！

黒い子供 もういらなから。

白い男 だからって、踏んづける事ないだろう。

赤い老婆 なに考えてるんだい？ このガキ。

黒い子供 だって、凄くないんだろ？

青い女 まあ、子供なんてこんなもんだよ。

黒い子供 それ、あげるよ。

白い男 え？ あげるって、私に？

黒い子供 うん。

白い男 でも君、せっかく飼い始めたんだから最後まで責任を

持つて飼わないと。

黒い子供 もう飼いたくなくなつたもん。

白い男 そんな、ダニールって名前までつけといて。

赤い老婆 あんたが余計なこといつたから興味なくなつたんだ

ね。

白い男 いや、そういうつもりじゃなかったのに。

黒い子供 ダニールのこと、可愛がつてあげてね。

白い男 ちよつと！ 困るよ、こんなの！

黒い子供 じゃあ、潰すから貸して。

白い男 駄目だよ！ 潰すなんてそんな。君が可愛がつてあげ

なよ。

黒い子供 いらななんだつてば。

赤い老婆 こりゃ、あんたが責任を持つて飼うしかないね。

白い男 ダニなんか飼いたくありませんよ！

赤い老婆 まったく！ なんて身勝手な男なんだろうね。

白い男 私のどこが身勝手な男ですか？

赤い老婆 だってそうだろう？ 言つてることがおかしいよ。

白い男 おかしくないですよ！

赤い老婆 自分がイヤだと思つてそのガキに押しつけてる

だけだろう。

白い男 逆じゃないですか！ あの子が私に押しつけたんです

よ。

青い女 あんた、そんなにイヤならこの子の言うように潰せば

いいじゃないか。

白い男 でも、ダニールだって生きてるんですよ。私には出来

ません！

黒い子供 僕が、やるよ。

白い男 何回言えばわかるんだ？ そんな簡単に殺しちゃ駄目

なんだ。

黒い子供 どうして？

白い男 どうしてって、可哀想だろ。もし君がダニールの立場

だったらどうする？

黒い子供 別に。

白い男 いきなり潰されるんだぞ、訳もわからずに。

黒い子供 うん、そうだよ。

白い男 そうだよって、そんなのよくないだろ。

黒い子供 僕、疲れた。(座る)

青い女 ねえ、あんたがダニールだったらどう思うの？

白い男 え？ いや、私だったら……そんな事されたら恨むよ。

青い女 誰を？

白い男 その踏んづけた奴かな。

青い女 じゃあ、いいじゃないか、その子に潰させれば。

白い男 どうして？

青い女 だって恨まれるのは踏んづけた奴なんだろ。

白い男 けどそれじゃあ、あんまりだよ。

青い女 だったら、あんたが面倒みなよ。

白い男 無理ですよ。昔から私、生き物とか飼うの下手なんです。

す。

赤い老婆 もう！ 男らしくないね。さつきからグチャグチャ！

ダニの一匹や二匹男らしくすばつと面倒みなよ！

白い男 いや、面倒みてもいいけど、それじゃ意味ないでしょ？

青い女 意味？

白い男 この子が飼うことに意味があると思うんですよ、それ

に私にはダニールを飼うことが出来ない立派な訳があるんです。

す。

青い女 訳って？

白い男 実は私アレルギーなんです、ダニの。

赤い老婆 本当かよ！

白い男 刺されると駄目なんですよ赤くはれて痒くなっちゃつ

て。だから、残念ですけど私には無理なんです。

赤い老婆 そんなこと信じられないね。

白い男 本当なんですよ！ 信じてください。

青い女 あきれた、もっとマシな嘘つきなよ。

赤い老婆 もしあたしがダニアレルギーだったら、そんなもん

真つ先に潰してるよ。大体あんた、やたらそいつの命がどう

こう言っただけでダニアレルギーの人間がそんなこと言うか

い？

青い女 言わないね。

白い男 そんな！ 私はこの子に命の大切さを知って欲しかったから、そう言うことを説明してただけでダニアレルギー

なのは本当ですつてば。

赤い老婆 だから！ 今さらそんな嘘ついたって遅いんだよ。

白い男 嘘じゃないですよ！ 体調が悪いと息苦しくなつて来

たりして大変なんですから、下手すると命に関わるんです。

赤い老婆 また大げさなこと言つて！ ダニに刺されたぐらい

で死ぬつてのかい？

白い男 ええ、一歩間違えればそうなりかねない体なんです。

私の体。

赤い老婆 そんなバカな。

白い男 だから！ あつ、そうだ！ あなたが引き取つて下さ

い。

赤い老婆 ヤダよ！ どうしてあたしが。

白い男 だって、このマッチ箱はあなたの夢なんですよ？

赤い老婆 そうだけど、その中身をなんとかしてくれよ。

白い男 じゃあ、いつそ逃がしましょうか？

赤い老婆 ああ！ そうだね、そうしようか。

青い女 ねえ、この子ちよつと様子が変だよ。

青い女、黒い子供を抱きかかえる。

黒い子供、息づかいが荒くなっている。

白い男 どうかしたの？

青い女 なんだか苦しそうなんだ。

暗転

### (シーン3) 夢

赤い老婆の家。

赤い老婆 テーブルと、赤いイスが二脚。そして赤いベッド。

テーブルにはマッチ箱が一個置いてある。

イスには白い男が座って青い本を読んでいる。

白い男は白い靴を両方履いている。

赤いベッドには、赤い布団にくるまれて黒い子供が寝かされてる。

赤いドアから赤い老婆が入ってくる。  
赤い老婆は、赤い靴を両方履いている。

赤い老婆 ただいま。

白い男 お帰りなさい、寒かったでしょ。

赤い老婆 どうだい？ 様子は。

白い男 落ち着きました、いちじはどうなるかと思いましたが。

赤い老婆 ああ。あの女は？

白い男 出かけましたよ、ライターを売りに。何か飲みますか？

赤い老婆 温かいモノを頼むよ。

白い男 もちろんですよ。

白い男、飲み物を持ちに行く。

赤い老婆、ベッドの近くにイスを持っていつて座る。

黒い子供のおでこに手を当てる。

赤い老婆 ……熱は、下がったようだね。

黒い子供 (目を覚まして) ああ……うん？

赤い老婆 おや、起こしちまったかい。どうだい？ 気分は。

黒い子供 僕。ここ……どこ？

赤い老婆 どこって、家だよ。

黒い子供 家？ なんで？

赤い老婆 え？ まあ無理もないか、随分うなされてたしね。

黒い子供 僕、病気なの？

赤い老婆 違うよ、ただちよっと熱がただけさ。

黒い子供 なんか……変な夢見てた。

赤い老婆 ああ、さぞかし怖い夢だったろう。

黒い子供 怖くは、なかった。

赤い老婆 でも、うなされてたよ。どんな夢だったんだい？

黒い子供 えーと、あれ？ 駄目だ忘れちゃった。

赤い老婆 そうかい。

白い男 飲み物を持ってくる。

白い男 ああ、気がついたね。気分はどうだいダニール。

黒い子供 ダニールって？

白い男 え？

赤い老婆 きっとまだ、頭がボーっとしてるんだよ。

白い男 ああ、そうですね。(赤い老婆に) はい、ホットミルクです。

赤い老婆 (受け取って) ああ、飲むかい？

黒い子供 僕？ でも。

赤い老婆 お飲み、元気になるよ。

黒い子供 うん。

黒い子供、赤い老婆からホットミルクを受け取り一口飲む。

黒い子供 おいしい。

白い男 よかったね。

黒い子供 でも、どうして？

白い男 どうしてって……難しい質問だなあ、ホットミルクが

どうして美味しいかなって考えたこともないからな。

赤い老婆 あたしに似てダニールは、なかなか賢いからね。子

供だましない加減な答えじゃ納得しないよ。

白い男 えーと、そうだな。やっぱり人間には敏感な舌がある

から美味しいって感じるんじゃないかな。体にいい物はおい

しいって感じるような仕組みになってるんだよきつと。わかっ

たかい？

黒い子供 うん。

白い男 (赤い老婆に) じゃあ、コーヒー入れますね。牛乳これ

だけだったので。

赤い老婆 ああ、そうしとくれ。

白い男、コーヒーを入れて行く。

赤い老婆 ほら、もう少しお飲み。

黒い子供 もう、いらぬ。

赤い老婆 そうかい、じゃあこぼすといけないからこつちに置

いごとくよ。

黒い子供 うん。僕もコーヒーが飲みたいな。

赤い老婆 子供がコーヒーなんか飲んじや駄目だよ。

黒い子供 コーヒーって黒いから好きなんだ。

赤い老婆 え？ 変なこと言うね。

黒い子供、赤い老婆にホットミルクを渡す。

赤い老婆、それをテーブルの上に置く。

黒い子供 僕の名前、ダニールって言うの？

赤い老婆 ああ、そうだよ。

黒い子供 ダニの名前じゃないの？

赤い老婆 ダニ？ ダニに名前なんかないだろう？

黒い子供 僕がつけたんだ。赤い小さなダニにダニールって。

赤い老婆 ダニに自分の名前をつけたのかい？

黒い子供 そうじゃなくて……でも、あの時、一緒にいたのに。

僕をどうするつもりなの？

赤い老婆 どうするって……ああ、そうか。まだ夢から覚めきらないんだね。可哀想に赤いダニが出てくる夢なんてさぞ怖かっただろう。

黒い子供 あなた……なんなの？

赤い老婆 何って、しつかりしておくれよ。お前のお婆ちゃんだよ。

黒い子供 嘘だ。

赤い老婆 ダニール！

黒い子供 僕はダニールじゃない！

赤い老婆 お願だから！ そんなこと言わないでくれ。

黒い子供 何を企んでるんだよ？

赤い老婆 企む？ どうしちまつたんだい？ ダニール。

黒い子供 違うって言うてるだろ！

赤い老婆 ダニールじゃなきゃ一体なんなんだい？

黒い子供 黒い子供だよ、みんな僕をそう呼ぶもの。

赤い老婆 誰がそんな風に呼んだんだい？

黒い子供 みんなだよ！

赤い老婆 だから、みんなって誰なんだい？

黒い子供 わからないよ、でもそう呼ばれても仕方なかったんだ。

赤い老婆 仕方ないってことはないだろう。お前にはダニールっていうちゃんとした名前があるんだから。

黒い子供 もしかして、僕を無理矢理あなたの孫にするつもり？

赤い老婆 あんたって！ いくらお婆ちゃんでも怒るよ！

一体この子は、どういうつもりなんだい！

黒い子供 そっちこそ、どういうつもりだよ！

白い男が来る。

白い男 ちよつと！ 何を騒いでるんですか？

赤い老婆 聞いとくれよ！ この子つたらあたしの事をあん

たつて呼んだんだよ！

白い男 ダニール、本当なのか？

黒い子供 あんた達なんなんだ？

白い男 なんなんだつて、なんなんだ？

黒い子供 僕はダニールなんかじゃないよ！

白い男 え？ 何を言ってるんだよ？

赤い老婆 ごめんよダニール！ 怒鳴ったりしたお婆ちゃんが

悪かった。お婆ちゃんを許しておくれよ。

黒い子供 僕にはお婆ちゃんなんかいないよ！

赤い老婆 ああ！ あんなに素直ないい子だったのに。

白い男 コラ！ なんて事を言うんだ！ お婆ちゃんに謝りな

さい！

黒い子供 帰る。

赤い老婆 帰るつて、お前の家はここじゃないか。

黒い子供 帰る！

黒い子供、ベッドから起きあがり立ち上がる。

白い男 まだ、起きちゃ駄目だよ！

黒い子供 放せよ！（テーブルの上のマッチを見て）あつ。

白い男 大丈夫か？

黒い子供 あのマッチだ……ああ。

黒い子供、立ちくらみを起こし座り込む。

白い男 ああつ！

赤い老婆 大丈夫かい？

黒い子供 うう。

白い男 ほら、いわんこつちやない。もう少し寝てないと駄目

だよ。

黒い子供 マッチ。

赤い老婆 マッチ？

白い男 さあ。もう一度、布団に入って。

白い男、黒い子供をベッドに寝かし赤い布団を掛けてやる。

黒い子供 ああ、僕どうなったんだろう。

白い男 ゆつくり寝なさい、こういう時は寝た方がいい。

黒い子供 ダニールがいるんだ、あのマッチ箱の中に。

白い男 マッチ箱？

赤い老婆 (マッチ箱を取って)これのことかい？

白い男 もういいから寝なさい。

黒い子供 それ！ 貸して。

白い男 ダニール？

黒い子供 早く！

赤い老婆 ああ。

赤い老婆、マッチ箱を黒い子供に渡す。

黒い子供、マッチ箱の中を見る。

黒い子供 (マッチ棒を一本出して)……マッチだ。

赤い老婆 マッチが、どうかしたのかい？

黒い子供 ダニールは？ 捨てちゃったの？

白い男 君はここにいないじゃないか。

黒い子供 入れ替えたんだね？ 僕が寝てる間に。

白い男 何と？

黒い子供 ダニールとだよ。

白い男 言ってる意味がわからないよ。

赤い老婆 この子はきつと混乱してるんだよ、なにか悪い夢を  
見たらしいから。

白い男 夢？ どんな？

黒い子供 忘れた。

赤い老婆 どうやら、その夢の中に赤いダニが出てきたらしい  
んだよ。

白い男 ダニって、あのダニ？

赤い老婆 そんな夢を見れば誰だって混乱するよ。

黒い子供 でも、悪い夢じゃなかった。

白い男 恐ろしい夢を見てたんだね、道理でひどくうなされて  
たわけだ。

赤い老婆 この子はきつと、まだ夢の中にいるんだよ。

白い男 ああ、そうかもしれないね。その中にいるとわからな  
いモノだよ。

黒い子供 もしかして、今が夢なんじゃないの？

赤い老婆 今って……今かい？

黒い子供 きつとそうだ！ 僕、夢の中にいるんだ。

白い男 でも、もし今が夢なら私達はなんなんだい？ ダニ  
ールの夢なのかい？

黒い子供 ああ、そうなんですよ？

白い男 面白いこと考えるね。

赤い老婆 この子は、発想が豊かなんだよ。

黒い子供 夢の中にいるんなモノが赤いんだね。

赤い老婆 ああ。これはあたしの趣味だよ。

黒い子供 趣味？

赤い老婆 赤は、落ち着く色だろ。

白い男 落ち着きませんよ。せめてこの布団ぐらいいいのに変  
えませんか？ ダニールの為にも。

赤い老婆 なに言ってるんだい！ ダニールだって赤い方がい  
いに決まってるよ。

黒い子供 僕、黒がいい。

赤い老婆 黒？

白い男 いや、でも布団はやっぱり白い方がいいだろう？

黒い子供 布団も黒がいいよ。

白い男 黒い布団なんて……それは、どうかと思うよ。

赤い老婆 まあ、どっちにしる家には赤い布団しかないからね。

黒い子供 僕は黒いモノが好きだな。ねえ、コーヒーは？

白い男 ああ、そうだ！ コーヒー入れてる途中だった。

白い男、慌てて去る。

赤い老婆 コーヒーは、まだ駄目だよ。

黒い子供 どうして？

赤い老婆 子供には刺激が強いんだよ。大体あんな苦いもの飲

んだって美味しくないだろ？

黒い子供 でも、好きなんだ。

赤い老婆 まったくコーヒーの味なんか、どこで覚えたんだか。

赤いドアから青い女が入ってくる。空っぽの鳥かごを持つ

ている。

青い女は、青い靴を両方履いている。

青い女 ああっ！ まったくとんでもない目にあつたよ！

赤い老婆 どうしたんだい？

青い女 ホラ！ 見てくれよこれ。(鳥かごをしめして)

赤い老婆 空っぽじゃないか、もしかして全部売れたのかい！

青い女 まさか！ ちょっと目を離したスキに、盗まれたんだ

よ。

赤い老婆 盗まれた？ ライターなんか盗む奴がいるのかい？

そんなに盗んでどうするんだい？

青い女 あたしに聞かれたって知らないよ。おや？ ダニール

の熱下がったのかい？

赤い老婆 ああ。

青い女 ダニールに何か買ってこようと思つてたのに、とんだ

大損だ。

赤い老婆 寒かっただろ？ これ(ホットミルク)飲むかい？

青い女 ああミルクか、貰うよ。

青い女、赤いイスに座りホットミルクを一口飲む。

青い女 なんだ、ぬるいね。

赤い老婆 おや？ そうだったかい。

青い女 見た訳じゃないけど、犯人はきつとあのマッチ売りだ

よ。

黒い子供 マッチ売り？

赤い老婆 まさか！ あんなおとなしそうな子供がそんな事す

るはずない。

青い女 今どきのガキは何するかわからないからね。

黒い子供 ねえ、マッチ売りは生きてるの？

青い女 え？ ねえ、ダニールはなに言ってるんだい？

黒い子供 マッチ売りは死んだんだよね。僕、ニュースで見たよ。

青い女 (赤い老婆に) 本当？ あの子、死んじゃたの？

赤い老婆 いや。多分、夢の中でマッチ売りが死んだんだらう。

青い女 何よ、夢って。

赤い老婆 この子は、熱でうなされて悪い夢を見ていたらしいんだ。

青い女 へー、なんだぞう。

黒い子供 違うよ、今が夢だよ。

青い女 今って？

赤い老婆 もう目が覚めてるのに、まだ夢の中にいる気持ちなんだろう。

青い女 ああ、それで。

白い男がコーヒーを二杯持って来る。

白い男 ああ、お帰り。

青い女 それ、温かい？

白い男 もちろんだよ、入れ立てだから。

青い女 あんた(ミルク)飲んでよ。あたしに、それ頂戴。

白い男 どうぞ。

白い男、テーブルにコーヒーを置く。

青い女と赤い老婆、コーヒーを飲む。

白い男、ミルクをテーブルの上に置き、読みかけの青い本を持ってベッドの端っこに座る。

青い女 ああ、温かくて美味しい。

赤い老婆 そうだね。

白い男 (本を読みながら) よかった。

黒い子供 ねえ、僕にも一口くれよ。

赤い老婆 駄目だよ。

黒い子供 どうして？

赤い老婆 言っただらう？ 子供にはまだ早いよ。

黒い子供 いいじゃないか一口ぐらい。

赤い老婆 諦めな。

青い女 ミルク飲むかい？ 温めてきてやるうか？

黒い子供 いらぬ。

青い女 こういうの飲まないと、大きくなれないよ。

黒い子供 なりたくない。

青い女 あら？ ダニールもいよいよ反抗期かな。

黒い子供 違うよ。

白い男 (本を閉じて) 君は疲れてるんだよ。もう少し寝た方が

いいよ。

黒い子供 眠くない。

白い男 目をつむっていなさい、そうすれば気分も落ち着くから。

黒い子供 もう落ち着いてる。

白い男 そうか、なら別にいいけど。

黒い子供 それ、なんの本？

白い男 これかい？

黒い子供 面白いの？

白い男 ああ。

青い女 それは、あたしの本だよ。読みたいの？

黒い子供 僕。読めないよ、字なんて。

赤い老婆 おやまあ、この子ったら。

白い男 大丈夫。この本には、字なんか書いてないんだよ。

黒い子供 でも、それじゃ本じゃないよ。

青い女 本だよ。

白い男 ホラ、見てごらん。(本を渡す)

黒い子供、青い本を開いてページをめくる。

黒い子供 本当だ……何も書いてない。

白い男 駄目だよ。もっとゆっくりよく読まなきゃ。

黒い子供 どうやって読むの？

青い女 読み方を忘れちゃったみたいだね。そんなの簡単じゃ

ないか。

黒い子供 でも、わからないよ。

青い女 読もうと思えば読めるよ。

黒い子供 勝手に想像しろって事？

白い男 そうじゃないよ。それじゃあ、読む必要ないじゃないか。

黒い子供 じゃあ、読んで聞かせてよ。

赤い老婆 まあ、ダニールたら。

青い女 甘えたいんだね。

黒い子供 そうじゃないけど、もういいよ。

青い女 いいのかい？

白い男 おい。からかつちゃ可哀想だよ、読んであげるよ。

黒い子供 本当に別に、もういいから。

白い男 そうかい？ じゃあ、返して。

黒い子供 うん、わかった。(本を返す)

白い男 さてと。あれ？ なんだか声に出して読みたくなってきたぞ。

黒い子供 え？

青い女 わざとらしい。

白い男 そんなことないよ。

赤い老婆 そうだよ声出して、聞かせておくれ。

白い男 ああ。じゃあ最初から読むよ。

黒い子供 うん。

白い男 昔々、森の近くに一人のお婆さんが住んでいました。

寒い冬のある日、お婆さんが目を覚ますと森の方から赤ん坊の泣き声が聞こえてきました。こんな寒い日の朝に赤ん坊の泣き声をするなんて変だなと思ったお婆さんは森の中に入っていました。すると大きな木の根元に可愛らしい赤ん坊がおりました。お婆さんは急いでコートを脱いで赤ん坊を包み家に連れ帰り、ミルクを飲ませて温かいベッドに寝かしつけました。赤ん坊の寝顔を見ながらお婆さんは、ついウトウトとしてしまいました。すると、その時。誰かドアをノックする者がおりました。

ドアをノックする音がする。

白い男 おや？ 誰か来たようだ。

赤い老婆 あたしが出るよ。

白い男 ええ。

赤い老婆、ドアを開ける。誰もいない。

赤い老婆 ……誰もいない。

青い女 いたずら？

赤い老婆 どうだろうね。おや？ 雪だ。とうとう降り出して

きた。

白い男 雪ですか。

赤い老婆 積もるかも知れないね。

青い女 きつと、あのマッチ売りだ。

白い男 え？

青い女 さつきのいたずら。

赤い老婆 あの子が？ どうして。

青い女 商売がたきへの嫌がらせだよ。

赤い老婆 (ドアを閉めて) わざわざそんな事するとは思えないけど。

青い女 でも他に思い当たらないですよ。

白い男 風のいたずらかも、何かが風に飛ばされてドアに当たったんですよ。

赤い老婆 まあ、そういうことにしとこうか。

黒い子供 ねえ、本の続きは？

白い男 そうだったね。あれ？ どこまで読んだっけ？

青い女 誰かがドアをノックするところまで。

白い男 ああ、そうだった。ええっと、するとその時、誰かドアをノックする者がありました。お婆さんがドアを開けるとそこには一人の少女がいました。

黒い子供 少女？

白い男 赤いベチコートを着て、真っ赤なほっぺをした可愛らしい少女でした。

赤い老婆 まさかその子は、マッチを売りにきたんじゃないかね。

白い男 マッチ？ どうしてですか？

赤い老婆 マッチはいかがですかって言ったんだろ？

白い男 言いませんよ。

赤い老婆 じゃあ、なんて言ったんだい？

青い女 あたしのカナリアを見ませんでしたか。

赤い老婆 カナリア？

白い男 そうです。その子はカナリアを探していたのです。

黒い子供 (青い女に) どうして先を知ってるの？

青い女 あたしの本だよ。

黒い子供 そっか。

白い男 カナリアを見ませんでしたか？ と、少女は悲しそう  
な目でお婆さんに聞きました。

赤い老婆 お婆さんはカナリアなんか知らないよって言ったんだらう。

青い女 言わないよ。

赤い老婆 じゃあ、なんて言ったんだい？

白い男 お婆さんは少女に、ベッドの赤ん坊を見せて言いまし

た。

青い女 (黒い子供を指して) この子があんたのカナリアだよ。

黒い子供 僕？

赤い老婆 この子のどこがカナリアなんだい？

青い女 カナリアじゃないか、エサを貰ってピーピー鳴く。

黒い子供 違うよ。

白い男 お婆さんと少女は幸せに暮らしたとき……おしま

い。  
黒い子供 もう、おしまい？

白い男 ああ。

黒い子供 それだけなの？

白い男 そうだよ。

青い女 ほら、子供はもう寝る時間だよ。

黒い子供 まだ眠くない。もつと本読んではよ。

白い男 もう本は、ないよ。

黒い子供 じゃあ、何かお話して。

白い男 おはなし？

黒い子供 なんでもいいから。

白い男 おはなしか。

黒い子供 ねえ、あのドアの向こうはどうなってるの？

白い男 え？ どうって何が？

赤い老婆 外の様子が知りたいのかい？

黒い子供 うん、外の世界も赤いの？

青い女 赤いわけがないだらう、今は夜なんだから。

黒い子供 じゃあ、黒いの？

赤い老婆 まあ、夜だからね。でも、雪が降ってるからだんだ

ん白くなってるかもね。積もれば明日の朝は、真っ白だ。

黒い子供 そうなの？

白い男 そうだよ。

黒い子供 (白い男に) ねえ、なら出て行ってよ。

白い男 ……私が？

青い女 もう、その時らしい。

赤い老婆 出て行きなよ。

白い男 ここにいちゃ、いけないんですか？

青い女 あんたの求めているものは、ここにはない。(マッチを

渡す)

白い男 マッチ？

青い女 わすれちまったのかい。

白い男 なにを？

青い女 さあ、知らないね。

白い男 どうなってるんだ？

黒い子供 そのマッチあげるから出て行ってよ。

白い男 こんな物、いらぬよ。ダニール！ 私は、ここに

たいんだ。

黒い子供 ここは僕の夢だよ。

白い男 なに言ってるんだ！ 夢なんかじゃないよ。

青い女 夢だよ！

白い男 え？

赤い老婆 朝が来て夢は消える。

黒い子供 だからもう出て行って。

白い男 イヤだ！ ここに……いさせてくれ。

黒い子供 どうして？

白い男 夢だったとしても……夢だったとしても、家族みたいだったじゃないか。ついさっきまで、私達は家族みたいだったのに……どうして出て行けなんて言えるんだよ！ この片隅でもいいから、頼む！ 私もここにいさせてくれ。

青い女 この子も出ていくんだよ。

白い男 え？

黒い子供 雪が消えて、また夜が来て世界が黒くなったら出て行く。

白い男 そんな。自分の夢なんだから、いつまでもいればいいじゃないか。

黒い子供 ヤダよそんなの。あんた、自分の夢を探しなよ。

白い男 私の夢？

黒い子供 自分の夢だったら、ここよりずっと居心地がいいはずだろ。

白い男 私には無理だよ。

黒い子供 どうして？

白い男 だって私には何もなさ過ぎるよ……頭の中まで白いんだ。

赤い老婆 ねえ、あんた。だったら物語を探しなよ。

白い男 え？

青い女 あんたの白い頭を満たす物語だよ。

白い男 それは……どうやったら見つかるんですか？

青い女 さあ、知らないね。

白い男 ……物語。

白い男、マッチ箱からマッチを一本取りだして擦る。

黒い子供 ものがたり。

赤い老婆 ものがたり。

青い女 ものがたり。

白い男、赤いドアから出ていく。

暗転

### (シーン4) 物語

白い男……小野

青い女……山田

赤い老婆……中山

黒い子供……殿村

イスが一つ。

小野が下から来る。山田、上手からイスを持って登場。

山田、イスに座る。小野もイスに座る。

山田 じゃあ、そろそろ終わりにしましょうか。

小野 すいません。

山田 何が？

小野 私、やっぱり駄目でした。

山田 そうですか。

小野 だから、すいません。

山田 もう、いいですよ。あなたは病気なんですから。

小野 病気？ そうなんですか？

山田 病名は人間です。

小野 ああ、飛べない病気ですね。

山田 お気の毒に。

小野 もういいです、どうせ終わりなんでしょ？

山田 さあ、知りません。

小野 私はどうしたらいいんでしょう？

山田 さあ、知りません。

中山が来る。

中山 ここでしたか、随分探しましたよ。

小野 私ですか？

中山 はい、実は私の病気の治療法が見つかりましたね。

小野 え？

山田 手術方法が解明されたんですか！

中山 そうなんです！（小野に）そこであなたに折り入ってお願いがあるんですけど。

小野 なんですか？

中山 私と一緒に加入したガン保険があったでしょう？

小野 ガン保険？

中山 あれを解約して手術代の足しにしたいのですが。いかがなものでしょうか？

小野 ああ、構いませんよ。でもその、解約ってどうすればいいんですか？

山田 マッチ売りの少女に、夢をはらませて下さい。そうすれば自動的に解約されます。

小野 夢ですか？ 難しそうですね。

山田 ええ、かなりね。

中山 やってみてください。

小野 私に出来ますか？

中山 一緒に来て下さい。こっちはです。

小野 いや、でも。

山田 急いだ方がいい。

小野 え？

山田 時間は永遠には続きませんよ。

小野 いつか終わるって事ですか？

山田 さあ、知りません。

小野 （中山に）私、やってみます。

中山 助かった。じゃあ、行きましょう。

小野 はい。

中山と小野、下手へと去る。

上手から殿村が来る。

山田 白い男か。

殿村 そろそろ名前を返してやったらどうだ。

山田 カナリアを見つけるまでは駄目だよ。

殿村 あいつ自身がカナリアなのに、どうやって見つかるんだ？

山田 そうだな。

殿村 どこまでいくつもりなんだろう。

山田 さあ。

殿村 もう物語の中にいるのに。

山田 まあ、仕方がないさ。

殿村 仕方がないのか。

山田 物語は続くんだよ……永遠にな。



